

座談会

思い出のトラック



参加者



渡辺達男
(1973年入社)



勝又英一郎
(1973年入社)



田中清
(1980年入社)



榎原弘行
(2007年再入社)



中島秀治社長
(1986年入社)



司会



トビー
(2012年命名)



川幡映実
(2011年入社)

ヒーターもなかった昔のトラック



昔のトラックというと何を思い出すビー?

田中: 昔はいろいろ違ってました。たとえば、ひとつのキーで他のトラックのエンジンもかけられたでしょ。エンジンを止める時は、キーをオフにするだけではだめで、デコンプ（デコンプレバー）を引っ張って、やっとエンジンが止まる。

渡辺: 30、40年前の話です。

田中: キャビンと運転席の間にメインスイッチが入っているボックスがありましたね。スイッチを入れないとエンジンがかからなかった。だからトラックが盗まれなかった。



ハンドルとかはどうだビー?

田中: 『重ステ』でした。笑。

渡辺: パワステがなかったですからね。

榎原: ハンドルは内がけで回していました。

田中: 停まるともう重くて切れない。駐車場なんか

たいへんだった。

榎原: それでも滝山に車庫があった頃は、トラック10台ほどを社屋ぎりぎりから10センチ間隔で駐めていたよね。翌日の出発スケジュールから逆算して、駐める順序を決めて。

中島社長: 渡辺さんが誘導員でした。

渡辺: あまり記憶にないんですが。笑。



その他はどうだビー?

勝又: 昔は油圧ブレーキでしたから、急ブレーキは、思い切り足を踏み込むしかなかった。

榎原: エアブレーキは大型だけで、4トントラックも油圧でした。

渡辺: ヒーターはあったがエアコンはなかった。

田中: 夏なんかもうたいへんでした。

榎原: 今は標準装備ですが、昔は助手席の足元にオプションで付けたんです。性能が悪くて時々、エアコンの中に付着した霜が塊で飛び出してくる。

勝又: 最初の頃は、クーラーだけでなくヒーターも付いていなかったですよ。

一同: それは知らない。笑。

勝又：トラックの3人座席の真ん中が開いて、エンジンのメンテナンスができる車種がありました。ヒーターがなかったので、そこを開いてエンジンの熱で寒さをしのぐんです。排気ガスで顔は真っ黒でした。ラジオもなかった。トラックはただ走るだけでした。

栞原：そういえば、昔のディーゼル車は、グロープラグを加熱してからエンジンをかけていました。

勝又：1000度くらいにするんです。熱くしすぎると、プラグが真っ赤に融けて落ちてしまう。

中島社長：田中さんに「ここに置いておけば煙草に火を付けられるよ」と言われてやってみたことがあります。ちょうど煙草が入る大きさなんです。便利だったけど、煙草のカスが熱線に残って、次に使った時に臭いのなんの。

東邦運輸のトラック小史



愛着のあるトラックはあるビー？

中島社長：中古車が多かったんだよね。

栞原：滝山の頃はいすゞ自動車製が多かった。

田中：「こばきん」（小林金太郎商店）さん専用のトラックは青一色でした。

中島社長：よく「出っ歯がひどかった」という話を聞くんですが、何がひどかったの？

栞原：トラックは前がフラットなのがほとんどですが、「出っ歯」というのはフロントガラスの下が張り出している車種です（いすゞ自動車TY型4トントラック）。あれは「重ステ」だし、荷台側面や背後の「あおり」が木製で重い。振動もひどかった。滝山時代は、この「出っ歯」が多かったですね。



青色の東邦トラック。

渡辺：八幡町へ移った頃（1979年）になるとUDの新車がだいぶ入ってきました。

田中：水色の「中島商店」のトラックはなつかしいよね。大型で、エンジンを切ると燃料が戻っちゃう。だからエア抜きをして燃料を戻してやらないとエンジンがかからないんです。

勝又：ディーゼルはポンプで燃料を送るので、ポンプにエアが入っちゃう。そうするとボタンを押しても燃料が回らない。

渡辺：中古で買った大型車が、原因はわからなかったんですが、セルは回るのにエンジンがかからなくて、キャビンを上げてエア抜きしていました。



この50年で、一番大きな出来事ってなんだビー？

中島社長：うちの会社の場合は、「ウイング」（箱型の荷台。側板と天井の一部を跳ね上げることができる）でしょう。第1号は1985年。「平ボディ」（荷台がフラットで屋根がない）を改造したんです。

栞原：「平ボディ」はシートの扱いがたいへんでした。でもウイング車は箱になっているから、シートが必要ないんです。作業が全然楽になった。感動したのをおぼえています。

3台分を1台に詰め込む荒業



昔は積み下ろしがたいへんだったって聞いたビー？

渡辺：昔は2トントラックでビールなら80ケース積んでいました。

勝又：最初の頃は100ケースでした。1ケース25キ



運転席上部平ボディシート。

口で 100 ケース。でもいろいろとうるさいから、80 ケースになった。フォークリフトなどはありませんから、自分たちの手で「棒積み」です。

渡辺：大型トラックでも自分たちの手で積み下ろしをしていました。

勝又：日本酒は一升瓶 10 本入りの木製のケースで運搬していました。30 キロはあったのではないのでしょうか。それを肩に担ぐ。

渡辺：倉庫の通路は狭いから、担がないと通れない。

勝又：でも、肩に胼胝（たこ）ができていますから全然痛くないんです。

渡辺：7月1日がすごく忙しかったんです。くそ暑い時にすごく忙しくて参りましたね。飯能市まで往復して、また積み込んで近場を回って、それからまた積み込んで、という時もありました。

勝又：ビールは木箱に 24 本入っていた。でも全部入っているわけではないんです。だから運んでいる最中に割れてしまうことがあった。

渡辺：コカ・コーラも醤油も木箱でした。

中島社長：とにかく限界まで積んでたよね。平ボディは天井がないから、とことん高くできる。ひどいになると、荷台の周りにベニヤ板を立てて、限界まで荷物を積んで、その上からシートを 3、4 枚かけた。それだけじゃなく、上が限界なら後ろを足す。荷台の後方からベニヤ板を渡して、そのうえに荷物を置き、落ちないようにロープで縛る。そしてシートをラップのように巻き付ける。4 トン車 3 台分を 1 台に積んでいたそうですね。笑。みんなよく、いやになりませんでしたね。

栗原：それが当たり前だったんです。

「教えてください」と。向こうへ着いたら、私が下ろさなければならなくなったんです。箱の上に乗って扉を引き上げるんですね。そうするとシカが勢いよく飛び出した。ところがバランスを崩して箱から落ちて、シカに追いかけられた。「もう、この仕事はやりたくないな」と。

中島社長：田中さん、よく行ったね。

田中：だって行けと言われたから。笑。しかもこの件は詐欺で代金をもらえなかったらしい。笑。

ベテランの知恵とコミュニケーション

中島社長：昔のドライバーさんがすごいのは、積み荷を瞬時に把握してたことです。

田中：たとえば、後輪の上に重心を置けば、ブレーキは効きやすくなる。ところが後ろばかりに荷物を置くと、今度は前が浮く。かといって前を重くするとハンドルが効かなくなる。後輪の前あたりに重心を置くと、ブレーキもハンドルも効きやすくなるんです。

栗原：俺も田中さんに教わりました。そのためにベニヤ板で荷台の前を区切って荷物を置けないようにしてましたよね。

中島社長：自分一人ではできないことは、田中さんみたいないい先輩が周りにたくさんいて教えてくれました。みなさん、工夫がすごかった。

田中：新車が来ると、鈴木さん（健夫、1972 年入社）が最初に乗るんです。そして半年すると、新車よりも状態がよくなっている。そこで他の人に渡すという流れになっていた。

中島社長：トラックを丁寧に扱うのでは、鈴木さんの右に出る人はいなかった。でも基本は、みんなが車

横浜北海道シカ道中記



へんな荷物はなかったかビー?

中島社長：荷物といえば、田中さんはシカを運んだらしいですね。

田中：1982 年だったと思います。北海道です。細長い箱にシカを入れて、それを 2 トンロング車の荷台に積んで横浜から北海道まで行きました。「北海道へ着いたら道端の雑草をむしって、この三角窓からあ



好きだったね。

栞原：八幡町の頃は日曜日になると、仕事は休みだけけど会社に来て、洗車したり、だべったりというのが普通でした。だから、みんなのトラックがいつもきれいだった。

田中：昼までいて、それから昼飯を食おうとみんな出て行って、それからいったん戻って解散という感じだね。今はやらないね。

栞原：昔は朝が早くなかったし、今はみんなの勤務時間がずれているからね。集まるのがむずかしい。

中島社長：「古き良き時代」です。

会長が対談会場に現れて言うことは？



みんなで仲良く仕事していたんだなー

栞原：ドライバーだけじゃなく、会長宅の隣に車庫があった頃は、出勤するとすでに会長が荷物の積み替えを始めていました。自分から動くタイプだったんでしょうね。

渡辺：こばきんさんの仕事が終わって帰社すると、倉庫で待っていて、4トントラックの助手席に坐らされて、ちがう仕事の積み込みへ一緒に行かされたこ

となんかもありました。

中島社長：俺は、会長は運転が上手ではなかった記憶がある。ヨーカ堂の开店準備の時も、バックヤードがごったがえしている時に、下がってきた4トン車に商品のテレビとかを踏みつぶされて、「だれだこのやろー」と野村君たちが怒鳴ったら、会長だった、とかありましたから。

田中：そう。昔、有楽町の交通会館まで仏壇を運んだ時に、会長も運転したんですが、トンネルに引っかけて幌の天井に穴を開けてしまっていた。そんな思い出があります。

中島社長：しかし、つらかった、たいへんだったという話は多いけれど、こうして笑って語り合えることができるのは本当にうれしいです。だけど、本当はね、こういう昔ばなしは、会長から話を聞くのが一番なんです。私（1986年入社）は昔のことは全然知らないから。座談会にも参加してほしい。

田中：あれ？ 会長はどうしたの？

中島社長：会長は用事があった。笑。しばらくしたら「おう、呼んだか。おまえ、ちょっと来い」って現れるかもしれない。昔のトラックで来たから、おまえらも積み込みを手伝えと。笑。

渡辺：少なすぎるって言われるかもしれません。笑。

栞原：もっと積めるだろうって。笑。



話題に出ている鈴木健夫さん。荷台部分は二重あおり。



出歯車両を後ろに幼少期の中島秀治社長。